

コンテンツが動かす地域の未来
～熊本県高森町における新しい地域づくり～

2021年5月

株式会社日本政策投資銀行九州支店



目次

1. はじめに	2 ページ
2. 熊本みらい会講演録	3 ページ
2 - 1. 基調講演	3 ページ
コンテンツ産業という巨大マーケット	3 ページ
熊本県高森町での取り組み	6 ページ
熊本から全国、世界と勝負する	8 ページ
高森町を才能の集まる場所にする	10 ページ
若い才能を育てる地域へ	12 ページ
熊本の持つ潜在力	13 ページ
2 - 2. パネルディスカッション	15 ページ
熊本県高森町の取り組みについて	15 ページ
なぜ高森町が活動の拠点になったのか?	19 ページ
地域の視点から捉えたコンテンツ産業	24 ページ
これからの展開について	29 ページ
熊本のみなさまへのメッセージ	33 ページ



1. はじめに

新型コロナウイルスの影響により、地域にとっては交流人口の激減等の大きな影響が及ぶ一方で、テレワークの普及や人々の意識・価値観の多様化等により、新たな機会が発生してきています。特に、5Gをはじめとする高速通信回線の普及により、テレワークやワーケーションの浸透を通じて、都市部から地域に移住することや、地域へ住みながら都市部の企業で働くことへのハードルは確実に低減しています。また、地域の持続可能な成長に向けては、海外を含めた地域外の需要を如何に取り込み、獲得した富を域内で循環させていくことができるかという点が一つの重要な要素となってきます。

こうした地域としての新たな機会を捉えた取り組みが、今まさに熊本県高森町で始まっています。この取り組みは、(株)コアミックスという民間企業と高森町という行政とが連携して、漫画を含めたコンテンツ産業に着目して地域の活性化に繋げようというものであり、海外を含めた若手人材の育成と域外需要の取り込み等を企図するものであり、今後の地域活性化に向けてのモデルケースの一つとなる可能性もあると考えています。

本レポートは、当行が2021年3月15日(月)に開催した熊本みらい会経済講演会「コンテンツが動かす地域の未来～熊本の才能・宝を活かす手法」における基調講演とパネルディスカッションの講演録を中心として、熊本県高森町を中心に展開されているコンテンツ産業を活用した地域づくりの取り組みを紹介しています。

なお、熊本みらい会経済講演会の基調講演及びパネルディスカッションにご登壇頂いた、株式会社コアミックス代表取締役社長の堀江信彦様、高森町町長の草村大成様及びヒトコト社代表でフリーアナウンサーの村上美香様をはじめ、ご共催をいただいた熊本商工会議所、熊本経済同友会、及び高森町、またご後援をいただいた、熊本県、熊本市及び(株)肥後銀行の関係者の皆様には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

2. 熊本みらい会 講演録

2-1. 基調講演

講師:株式会社コアミックス 代表取締役社長 堀江信彦

演題:コンテンツが動かす地域の未来「熊本の才能・宝を活かす手法」

略歴:1955 年に熊本市に生まれ。1979 年に集英社に入社。週刊少年ジャンプの編集者として、『北斗の拳』や『シティーハンター』などの多くの人気作品を生み出し、1993 年に 5 代目編集長就任。2000 年 6 月に、株式会社コアミックスを設立。2018 年 10 月には、漫画家デビューを後押しするための拠点「コアミックスマンガラボ」を熊本に設立。熊本県阿蘇郡高森町の地域づくりと連携した、人材発掘や育成も手掛けている。

<コンテンツ産業という巨大マーケット>

初めまして。堀江と申します。初めましてではない方もたくさんお見えになっておりますので、心強いです。40 年以上も前に、漫画の編集者として働き始めまして、そのうち漫画専門の出版社を設立するなどして、一応漫画一筋で生きております。



株式会社コアミックスとは？

2000 年、『週刊少年ジャンプ』の 5 代目編集長を務めた堀江信彦が、漫画家の原哲夫、北条司、次原隆二と共に、漫画の編集・漫画雑誌の出版を目的として、東京吉祥寺に設立。

堀江信彦

(出典:(株)コアミックス)

漫画といいますと、日本人にとってはあまりにも身近すぎるメディアですから、皆さん意外と、どの程度の規模のビジネスなのかをご存じないと思います。子供のものだろう、と思う程度で、なんとなくやり過ごされているのではないかと思います。

会社名	株式会社コアミックス
設立	2000年6月14日
資本金	8200万円
事業内容	漫画雑誌・コミックス・書籍の出版、デジタルコンテンツの制作・配信、 ライセンス事業、アーティスト育成事業など
役員情報	代表取締役社長 堀江 信彦 取締役 北条 司／原 哲夫／次原 隆二／持田 修一／宮 直樹／鈴木 正隆 監査役 宮澤 敬甫 執行役員 渡邊 慎之介／野澤 祐一／花田 健／西田 創／石川 悦弘
社員数	79名 ※2020年4月1日現在
お問い合わせ	TEL.0422-24-6789(代表) FAX.0422-24-6785
本社	〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 1-9-9 吉祥寺じぞうビル
第2オフィス	〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 2-11-3
第二本社	〒869-1801 熊本県阿蘇郡高森町上色見 2803番 アーティストビレッジ阿蘇 096区

2001年、『週刊コミックバンチ』を創刊。
北条司『エンジェル・ハート』、原哲夫／監修・武論尊で『蒼天の拳』連載開始。

2010年、『月刊コミックゼノン』を創刊。
現在はコミックゼノンの他に、『WEBぜにょん』、『コミックタタン』、アプリ
『マンガぼっと』を発行しています。



主なライセンス作品



(出典：(株)コアミックス)



現在（2020 年）の日本国内におけるコミック市場規模は、6,000 億円を少し上回るくらいの規模（全国出版協会・出版化学研究所）です。実は、現在のようなコロナ禍の状況において、市場規模が伸びています。みなさん、部屋に引きこもることになりますので、電子書籍がよく売れるようになります。電子書籍の約 8 割はコミックであり、小説などの文字のものはほとんど売れません。従って、電子書籍とはほぼ漫画だと思われて、間違いはありません。

市場規模が約 6,000 億円だとすると、単行本や雑誌など紙のものはその内の 44%、電子書籍は 56%ということで、紙の単行本とコミックを合わせると、約 2,700 億円になります。電子書籍は 3,420 億円です。2019 年に、電子書籍の市場規模が紙の本の市場規模を上回り、さらに伸びているということです。

コアミックスは漫画専門の出版社です。漫画出版社としては、去年の漫画の売上は全国で 8 位でした。当然ですが、私が前に在籍していた集英社が圧倒的な 1 位です。これが、日本国内における市場の状況です。

世界メディアミックス総収益ランキング		(米国金融会社 TITLE MAX調べ)
「メディアミックス総収益＝コンテンツのライセンス・許諾案件の総収益」		
1位	ポケットモンスター	総収益921億ドル（約10.1兆円）
2位	ハローキティ	総収益800億ドル（約8.8兆円）
3位	くまのプーさん	総収益750億ドル（約8.3兆円）
4位	ミッキーマウス	総収益706億ドル（約7.8兆円）
5位	スターウォーズ	総収益656億ドル（約7.2兆円）
6位	アンパンマン	総収益603億ドル（約6.6兆円）
7位	ディズニープリンセス	総収益452億ドル（約5兆円）
8位	スーパーマリオ	総収益361億ドル（約4兆円）
9位	少年ジャンプ	総収益341億ドル（約3.8兆円）
10位	ハリーポッター	総収益309億ドル（約3.4兆円）

(出典:(株)コアミックス)

海外になりますと、様相が変わってきます。お手元に資料をお配りしています。クロスメディア・フランチャイズというのは、1つのキャラクターをいろんな企業に使用許諾を与えることで、その商品がつくられ、販売されていくことです。こちらは、その売上高をまとめたものです。なんと、世界 1 位は『ポケモン』で、



売上高は約 10 兆円です。ちなみに、私が在籍していた少年ジャンプでは、レジェンド作品を除き、約 3.8 兆円になります。また『ドラゴンボール』は、約 2 兆 6000 億円になります。『Fist of the North Star』というものがあると思います。これは、『北斗の拳』です。これは、約 2 兆 4000 億円です。また、『ONE PIECE』があります。ONE PIECE の作者は、熊本出身の作家さんです。これが、約 2 兆円という数字になっています。

このように、皆さんが知っているようなレジェンド作品というものは、クロスメディア・フランチャイズでは、約 2～3 兆円という経済効果をもたらしています。意外と、皆さんご存知ではありません。日本の出版での市場規模は約 6,000 億円ですけれども、時間をかけていろいろと工夫していくと、世界では 2 兆円や 3 兆円という数字になります。こういうビジネスであり、実は非常に経済効果が高いものです。皆さんも実感されていると思いますが、『くまモン』も約 1 兆円の売上があるそうです。これはすごいことですよね。どこかの国の国家予算を抜いて、大きな市場を持っているわけです。皆さんは、これを結構見過ごされています。それに、漫画の場合は、紙と鉛筆があればいいですし、場所も選びません。現在、我が社が関わっている作家のほぼ半分は、東京からではなく、地方から電子メディアで作品を送ってきます。その作品を中央で印刷し、配本し、配信していくことになります。つまり、場所を選びません。約半分の作家が地方に住み、自分のいたい場所にて、快適な生活を過ごしながら創作活動をしているということです。それが、漫画家の常識になってきています。そういう状況にありながら、その環境をより上手く整備していくことができれば、より生産効率を上げ、より良い作品をつくることができるということです。

<熊本県高森町での取り組み>

我が社では、約 5 年前から、地方で漫画制作の鍛錬をし合い、お互いに伸ばし合う場所をつくろうということで、いろいろな候補地を探していました。たしかにいろいろな候補地がありましたけれども、その中で、熊本の高森町町長の草村さんと出会いました。高森町は私も幼い頃に約 3 年間お世話になった場所です。候補地を探すときに、どこの地方の方も「うちは水が美味しいし、空気が美味しい」と言われますが、そういった場所は日本中にたくさんあります。ですから、

それは決め手になりません。熊本という場所は、『くまモン』の存在も大きいと思いますが、キャラクタービジネスに対する興味をお持ちの方が多かったのです。草村さんも非常に行動力がある方でした。そうして、高森を拠点に定め、約7億円をかけて旧高森温泉の施設リノベーションや周辺整備により『アーティストビレッジ 阿蘇 096 区』を設立。これからは高森町でやっていこうと決めました。

●アーティストビレッジ 阿蘇096区(2020年11月～)



漫画家誘致や劇団創設に伴い、若き世界・国内の漫画から発展するエンタメ業界の「クリエイター」「アーティスト」たちの活動・移住定住の拠点として、高森町にアーティストビレッジ阿蘇096区を設立。

敷地内には「居住エリア」と「本館施設」を有し、本館施設内にはアーティストたちのための「稽古場」「動画編集スタジオ」「収録スタジオ」「漫画制作スタジオ」に加え、「食品開発のためのセントラルキッチン」も備わっています。



この「阿蘇096区」を、多方面の業界と連携するための機関と発展させ、将来的に漫画、演劇、アニメ、映像、ゲーム、おもちゃといった漫画から発展するエンタメ新産業を創出する、漫画による「人・社会・ビジネス創造」の拠点とすることを目指しています。

(出典：(株)コアミックス)



(出典：(株)コアミックス)

我が社では、世界で最大の新人漫画賞を主催しております。資料の中にありますので、見ていただければわかると思います。世界中に優秀な漫画家がおられますので、日本人の作家だけではなく、彼らも高森に集めて、切磋琢磨させて、そこから漫画や作品を発信してもらうべく、取り組んでいます。現在はコロナの影響で、外国人の作家さん達を呼ぶのが少し遅れています。

海外漫画家の発掘「サイレントマンガオーディション」(2012年～)



前述の海外のコンテンツ収益実績などの背景もあり、世界中のマンガクリエイターによるIP創出のための育成の必要性から、2012年より日本以外の世界に向けたマンガ賞を開始。

日本マンガ最大の魅力である「演出力」を審査する賞として、セリフを一切使わない短編「サイレントマンガ」を募集。
その結果、日本マンガ特有の文法を使った応募作品が世界中から集まり、セリフがないからこそ言語や国境を越えてお互いが解りあえる、レベルの高い素晴らしい作品が多く生まれる事になりました。



現在も続いているオーディションでは
応募数累計: 7,326作品
参加クリエイター: 4,069名
総参加国: 117カ国
 となり、世界最大級のマンガ賞と言えます。(2020年現在)



オーディション入賞者は、日本からバイリンガルの担当編集者が付き、ステップアップの次回作に向け、日々作品づくりに励んでいます。

(出典:(株)コアミックス)

＜熊本から全国、世界と勝負する＞

既に高森町での態勢は整ってきています。それに先立って設立した『096k (オクロック) 熊本歌劇団』という、女性だけの劇団も高森の施設を拠点としておりまして、今は彼女達が合宿生活をしています。皆さんに面白い情報として、1つお伝えします。RKK 熊本放送では、毎週水曜日の深夜 12 時 55 分から『096k カゲキッ! 団』という、彼女たちが出演している 30 分の冠番組を放送しています。裏では、日本の人気者のタレント達がやっている番組がひしめいていますが、熊本で制作して、熊本の素材で番組づくりをするという、RKK のこの番組は、同時時間帯の視聴率 1 位の週もあります。全国区のタレントさんに、負けていないわけですから。それで皆さんも面白がってくださり、良いときには、深夜ですが約 3%、同時時間帯では 1 位という視聴率を獲得しております。この結果には、テレビ局の方も驚かれていますのではないかと思います。地方から発信しても、中央でつく



った人気タレント達の作品に伍していくということができるということが、証明されていると思います。

地方から作品を発信してセールスをするという意味では、手前味噌ですけど、私は今『前田慶次かぶき旅』という漫画作品の原作を書いております。月に10日間、熊本に帰ってきて、原作を書いております。それを東京の我が社の出版部門に送信し、印刷し、既に40万部を発行しております。単行本のビジネスは簡単です。1冊売ると、約200円儲かります。40万部ですと、既に8,000万円の利益が上がっているということになります。地方にいてもそういうことは楽々可能だということの、1つの事例になるかと思います。むしろ、地方にすることが逆にメリットになっていくという部分も多々あるのではないかと思います。

私は熊本で非常に快適なマンションを賃貸しておりますが、驚いたことがあります。東京の良い立地であれば、おそらく約3倍の家賃はするだろう、ということです。我が社の熊本にいる社員は、良い場所で、本当に優雅な生活ができるようになりました。企業を経営しておりますと、経済的にもメリットが大きいということがございます。

●096k熊本歌劇団(2020年9月～)



漫画を原作にしたライブを披露する 「火の国」熊本発の女性歌劇団

音楽や演劇、スポーツの世界にはライブがありますが、漫画にはライブがありません。ネットでのコンテンツが容易で豊富になった現代では、ライブこそが価値を生みだします。また漫画と同様「熊本から世界へ発信するコンテンツ」のひとつとして、阿蘇の地に新たな劇団を創設することを決めました。

日本全国からの応募総数 116名のうち、オーディションを勝ち抜いた 22名の劇団員が集結。9月15日より熊本に移住し市内にて基礎レッスンを開始、11月1日より阿蘇郡高森町「アーティストビレッジ阿蘇 096区」に移り、本格レッスンとPR活動を開始しています。

劇団名の「096k熊本歌劇団」は、熊本の市外局番 096に歌劇団のkで「096k」とし「オクロック」と読みます。そう「時」の意味です。

自分の可能性を信じて第一歩を踏み出した若者たちが、この劇団で夢の時を刻んでくれる事を、私たちは心から願っています。



第一弾の演目はヒット漫画「前田慶次かぶき旅」

(出典:(株)コアミックス)



＜高森町を才能の集まる場所にする＞

『096k 熊本歌劇団』では、22 人（3 月末現在）¹の劇団員が高森町で合宿生活をしています。結成から約半年が経ちますので、約半分が辞めるのではないかと考えていたのですが、実際には1人も辞めていないことに、驚きました。彼女達に聞きますと、おしゃれで住み心地のいい環境があるということが決め手だということでした。高森町といいますと、草村町長に申し訳ないですが、熊本の中でも田舎です。皆に高森に住めと言いましたら、『ワッ！』と言い出します。私の家族もそうでした。ですが、今は『天国だ！』と言いながら、喜んで生活しております。

海外の子達にも、既に高森の情報は YouTube や Line など送っておりますが、皆諸手を挙げて、『早く高森に移住したい』ということで待ち構えております。今後、熊本の高森という場所に、突然世界各国から人が来て、何百人もの外国人がウロウロしている、という状況になります。芸能人や音楽家がいる、不思議な町ができていくのだらうという気がします。それにまつわる、いろいろなものも集まり、1つの面白い町が形成されていくのではなかろうか？と考えています。高森には『アーティストビレッジ阿蘇 096 区』という施設をつくりましたが、漫画や演劇だけではなく、アートに関わるもののすべてを集めて、そこに1つの町をつくりあげるといふかたちを考えております。そういうアーティストの村をつくるということです。ハリウッドのようなものだとお考えになれるといいかと思います。IT においては、シリコンバレーです。そういう場所をつくり、発信していきたいと思います。

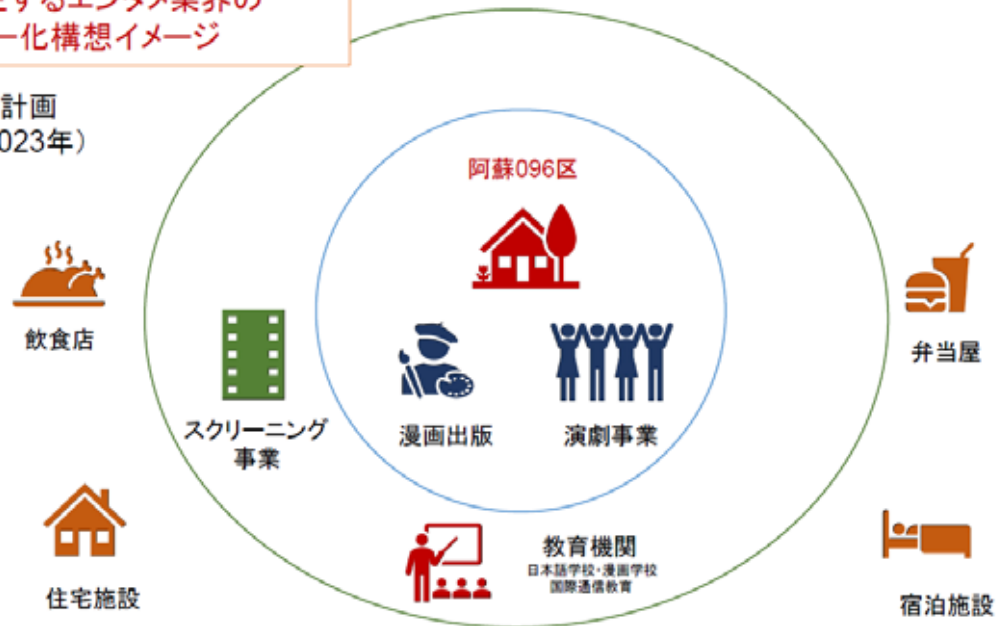
また、私達はアートを活用しますので、国立公園内という立地とも良いマッチングだと思っております。アートのビジネスは、有害な排出ガスも、大きなビルもありませんので、自然を壊しません。自然と共生して活動ができるという意味では、国立公園内という高森町の立地は、私達にとってはより魅力的な場所だと考えております。震災や豪雨、コロナなど、いろいろな不幸なことが起こりますと、若い人はどうしても縮こまった生活をしてしまいます。他方で、私達漫画業界やエンターテインメント業界は、若い人にチャンスを与えるということが、ビジ

¹ 『096k 熊本歌劇団』は 2021 年 4 月より 3 名増員し、4 月末現在で 25 名になっている

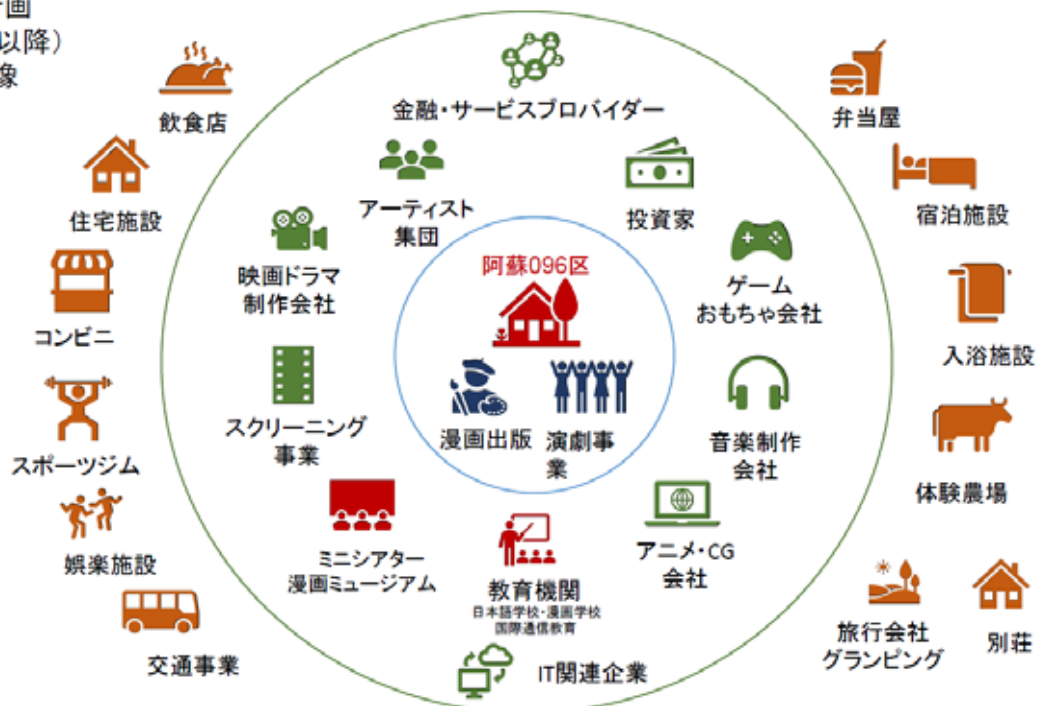
ネスの根幹になってきます。若い人にチャンスを与え続けると、必ずビジネスになります。ここ熊本で、若い人にチャンスを与える場ができて、そこが活性化をしていくということが、1つの道ではないかと思います。

**阿蘇096区を拠点とする
漫画から派生するエンタメ業界の
シリコンバレー化構想イメージ**

短期・中期計画
(2020年～2023年)



長期計画
(2023年以降)
将来像



(出典：(株)コアミックス)



＜若い才能を育てる地域へ＞

しかし、アーティストや才能を育てるためには、若干の時間がかかります。1人の漫画家を育てるためには、最低5年はかかりますので、その5年間を一生懸命我慢してやっていくということになると思います。私達は、何年も活動しておりますので、漫画家達が集まれば、数年後には皆さんの目や耳にとまる作品が熊本から発信されることになると思います。そういう取り組みを、私は熊本に提案したいと思ってまいりました。

漫画ビジネスは、大きなインフラ投資などはまったく必要ありません。紙と鉛筆だけがあればいいのです。それに加えて、地元の方達の愛情が必要です。それらがあれば、成立するビジネスです。意外と皆さん、これをスルーされています。かつて、漫画等の国際的な拠点（国立メディア芸術総合センター）を設立しようという構想がありましたが、実際にはそういうバックグラウンドも必要であり、産業として若い人にチャンス을あげて、ビジネス化できるものなのです。経済効果が高いものなのだ、ということを言いたかったのだと思います。ただ、それが言葉足らずに終息したのであろうかと思います。

『くまモン』が生まれ、『ONE PIECE』が生まれ、江口寿史さんという『すすめ！！パイレーツ』を描いた方も熊本県水俣市出身です。『SLAM DUNK』を描いた井上雄彦さんは鹿児島出身ですが、熊本大学に通っておりました。このように、熊本という場所は、漫画にもゆかりがあります。

また、漫画から派生するものとして、絵コンテを描ける力というものがあります。絵コンテを描ける力がありますと、どんな企業に行っても必ず重宝されます。ゲームの世界や、映画の世界に行っても、絵コンテを描けるというのはたいへんな才能になります。

ゲームをつくるときは、格闘ゲームもそうですが、1回絵コンテでつくり、そこからCGをつくっていくという作業をします。従って、絵コンテを描くということは、設計図を書くことと同じです。それができるということは、すごい才能です。例え漫画家にはなれずとも、漫画の修行をすれば、そういう道に行くことができるという、1つの大きなチャンスにもなっていくと思います。



＜熊本の持つ潜在力＞

いやらしい言い方をすれば、ここは環境がいいということで、私達は熊本という場所に目をつけたということです。しかも高森町では、草村町長がいろいろな構想を持って、早期に高速通信網を整備しておられました。ことビジネスとなると、普通使う容量とは少し桁の違う要求をするのですが、それにも対応できるようになっておりましたので、非常に環境が良い場所でした。

これから地方に企業やビジネスを持ってくるときには、通信環境は大きなキーワードになってくると思います。5Gになれば、もう少しいろいろと簡単にはなっていますが、そういったインフラ的な部分のメリットをお考えいただけると、なお発展していくのではないかと思います。

先程紹介したクロスメディア・フランチャイズのランキングについてです。これをよく見ますと、漫画作品がものすごく多いです。つまり漫画作品を集めると、何十兆円になります。皆さんこれに気がついていませんが、日本はすごいです。

『ポケモン』、『ハローキティ』、『アンパンマン』、『マリオ』、『ジャンプ』、それから『ガンダム』、『ドラゴンボール』、『北斗の拳』、『ONE PIECE』、『遊戯王』。これだけでも、全部集めたら何十兆円です。これは何年もかかっている金額ですけど、これだけのものをみすみす放っておく手はありません。

今回、劇団をつくってつくづく思うことですが、眠っている才能というものがあるんです。今回は日本中から 22 人（3 月末現在）を集めましたけれど、半分は熊本の子達です。こんなところにそんな才能がいた、というようなことが、結構起こります。漫画家もそうですが、やはり才能ある人というのは、どこにでも等しくおります。声をかけてあげることで、発掘できるわけです。才能というものは場所を選ばずに眠っているということをつくづく感じます。熊本を中心とした、九州からの才能というものを、当面は僕達が発掘していこうかと思います。

東京から電車で行ける範囲内ですと、皆東京に集まってしまいます。そのため、東京から電車で行けず安易に行けない範囲を狙うという点で、九州は最高です。東京の人達は、九州のほうが北海道よりも遠いという認識をお持ちです。たしかに、飛行機のフライト時間も違います。その反対で、九州の若い人は東京に行かず、温存されている、ということです。才能が温存されておりますので、その人達をしっかりと掘り起こして、ビジネスに繋げていくことができれば、私達のビジネス



はそこから世界に発信できます。世界を相手にしたビジネスですので、何兆円というマーケットの中でビジネスをしていくことになると思います。

初めて見た数字が多かったと思いますけれども、実はこれが、日本という国が大事に育ててきたアートというジャンルのビジネスです。皆さんには、是非そこをもう一度見直していただければと思います。もしも、もっとこうすればいいのではないか、というアイデアがございましたら、是非言っていただければと思います。私達は、それをまっすぐ熊本のみなさんと一緒にやっていきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。



2-2. パネルディスカッション

パネリスト①：株式会社コアミックス 代表取締役社長 堀江信彦 (以下【堀江】)

パネリスト②：熊本県高森町長 草村大成 (以下【草村】)

略歴：高森町長(2011 年 4 月～3 期目)、南阿蘇鉄道(株)代表取締役社長を兼務。民間会社経営を17年経験。「将来の子どもたちに誇れる高森町へ」を掲げ、政策実現のためのリーダーシップを発揮。2019 年 10 月には、(株)コアミックスと連携協定を締結、エンターテインメント業界との連携によるまちづくりに取り組む。

コーディネーター：(株)ヒトコト社 代表・フリーアナウンサー 村上美香 (以下【村上】)

略歴：民放テレビ局に入社後 25 歳からの 21 年間、月曜～金曜の夕方 2 時間生放送のキャスターを務める。現在は、講演、司会、番組作りをはじめ、トークショーやスピーチ講座などに活躍の場を拡げる。

【村上】本日のテーマ「熊本の才能・宝を活かす手法」のトークセッションに移ります。ここからのトークセッションには、私もコーディネーターとして参加させていただきます。パネリストには、先ほどご講演をいただいた堀江様に加え、堀江様とともに地域づくりや人材育成の取り組みを行っていらっしゃる、熊本県高森町の草村大成町長をお招きしています。

まずは、草村町長の簡単な自己紹介と、高森町の取り組みなどをお教えいただきたいと思います。

＜熊本県高森町の取り組みについて＞

【草村】ご紹介いただきました、高森町の草村です。熊本の経済界や行政関係の多くの方に、堀江さんが掲げられてきた高森を拠点とした長期計画である『堀江ビジョン』を聞いていただけることは、県の進む方向の中で、必ずどこかでプラスになると思います。是非、本日の堀江さんのお話からヒントを得て、次の時代に備えていただければと思います。

高森町は、熊本県で最東端にありまして、阿蘇くじゅう国立公園の中に位置している自治体です。既にご存じの方が多いと思いますが、町内には南阿蘇鉄道の



本社も所在しております。これまでの災害復旧においては、多くの国民の方や県民の方からいろいろなご支援をいただきまして、今は復旧の途中です。

手前味噌といたしますか、私のマニフェストですけれども。なぜこれを出したかといいますと、実は、小さい市町村で政策集を掲げるということはあまりないことです。しかし高森町では、12年間この施策を行っています。

選挙で選ばれた首長の施策、市町村が持つ総合施策など、多くの施策等をリンクさせ、行政運営をやっているということです。これは、田舎ではなかなか難しく、10年かかりましたが、我が町では完成しています。熊本県庁から、2回ほど若手の職員を副町長として出向して頂きました。これらにより、県の施策の組み方と、町がもともと持っている施策と、選挙で選ばれた首長の施策をリンクして運営をしているというところです。

今お手元にある資料の中の1番が、南阿蘇鉄道の創造的復旧・復興であり、都市圏へのアクセス向上です。私はこれをアクセス30分台構想と謳っています。熊本県は大空港構想を持っていますが、それに直接リンクするものです。年間2,000万人のインバウンドを目指し、直接南阿蘇地域へお客さんに来ていただくという施策です。

①南阿蘇鉄道の創造的復旧！ 都市圏アクセス30分台構想実現（JR豊肥線への乗り入れ）

- ➡熊本空港アクセスとの連動
- ➡観光客インバウンドへの目的地
- ➡移住定住の起爆剤に
- ➡高齢者の免許返納社会への対応

(出典：高森町)

もう1点、こういう施策を行う中で、インフラが大事だということで、県では中九州横断道路構想というものを大きく掲げています。新しい産業を熊本で活性化させることにもなります。これは、県の横軸の道路になりますが、中九州横断道路が完成すると、九州各県の産業の中心になると思います。その後にはさらに、県の縦軸が必要になります。今はこういう意識の醸成を図っている途中です。これらは、観光立県である熊本県、観光立町を謳っている阿蘇郡市の自治体にとっては、最大級の付加価値を生むのではないかと考えています。



(出典:高森町)

3つ目は、エンターテインメント産業との連携というところを掲げています。それで今はまちづくりをやっている途中でございます。エンターテインメント産業との連携については、ソフト事業ですので、漠然としているところはあるかと思えます。先ほどの堀江さんの話にありましたように、そのベースとなるのが、堀江さんが描く将来像の『堀江ビジョン』でありまして、町や、行政議会や、住民の方が一緒になって、同じ方向を向いて行っているところが、うちの町の特徴です。私も3期目に入りましたが、たいへん多くの方にご協力をいただき、ここまでやってきました。このようなコロナ禍の中でも、堀江さんの『堀江ビジョン』を皆さんに聞いていただける機会があるということは、たいへん嬉しく思います。

③エンターテインメント業界との連携推進！

- 企業誘致ではなく、高森町独自の新たな産業拠点の創出
- 新たな産業創出による税収入アップ
- 世界に発信できる熊本・南阿蘇 高森町の舞台創出

目標1 エンターテインメント業界との連携推進による新産業創出を目指す

- ・ 連携のための協定締結を実現する
- ・ 産学官連携による既存地域資源と情報通信基盤施設をフル活用する
- ・ 漫画による「人・社会・ビジネス創造」への取り組みを推進する
- ・ [仮称]たかもり漫画アカデミー構想実現のための「企業版ふるさと納税」の国認定を実現する
- ・ 世界の漫画クリエイターによる活動拠点整備への協力・移住定住支援の検討
- ・ 「くまもと国際漫画CAMP」の継続開催(ふるさと納税制度・補助事業活用)
- ・ 漫画クリエイターによる「MADE IN たかもり漫画」の制作を推奨する
- ・ 漫画制作関連業務(スクリーニング等)の産業化支援による新たな税収創出
- ・ 教育機関「漫画アカデミー」の誘致実現(産学官連携による町内既存施設活用)
- ・ 漫画編集機能の誘致への取り組み(情報通信基盤施設フル活用)
- ・ 編集者の移住・定住実現による住民税アップ(年600万以上を目指す)

・ エンターテインメント業界との連携による海外インバウンド増加を実現(受け入れ体制充実・多言語対策・漫画による観光情報発信・案内等)



(出典:高森町)

高森町の基本的な行政運営の方針は、『スピードは最大の付加価値を生む』ということです。これをベースにして、『思想より良い提案(行動)』ということをして、12年間ずっと、職員と行ってまいりました。当然ですが、皆さんと一緒にいろいろと迷いながらやってまいりました。持ち前の『迷ったときはフルスイング』という気持ちで、一緒に職員と共にやってこられたのも、堀江さんと出会えたことが大きいと思っています。

町としては、教育にもたいへん力を入れております。既にご承知かと思いますが、ICT教育では、おそらく国公立小中学校では日本一ではないかと思っています。教育は可能性の拡大、という点を一番に挙げて、いかに魅力的な大人になるのかという教育で、行政を展開しているところです。

高森に誇りを持ち、夢を抱き、元気の出る教育

(実践例) 教育ICT環境の整備

- ◆H24から段階的に導入
- ◆目的に応じたツールとしてのICT活用
- ◆教師の活用→児童生徒の主体的活用へ
- ◆遠隔教育の実践は6年目を迎える
- ◆持ち帰り学習の実践は4年目を迎える



新型コロナウイルスによる休校期間中には、
全国に先駆け**在宅での遠隔授業・生活支援**
を**全児童生徒に実施!**



- ・全教室電子黒板常設
- ・実物投影機常設
- ・デジタル教科書完備



- ・タブレット端末(一人一台)
- ・学習支援ソフト
- ・無線LAN整備
- ・Web共有ボード



- ・遠隔教育
- ・オンライン教育
- ・Gsuite活用
- ・全家庭Wi-Fi環境整備



- ・新たな教育の風を興す遠隔教育
- ・高森町タブレット図書館
- ・熊本日日新聞社・高森町・高森町教育委員会連携協定事業

町内全戸に整備した光通信環境(正しい情報の発信と共有・共感の高森町)

日本一地域密着型番組 光ケーブルテレビ “たかもりポイントチャンネル(TPC)”

◇行政サービスのお知らせ



- ・災害時緊急放送
- ・行政、くらしの情報(毎週更新)
- ・生中継(議会、成人式、イベント)
- ・警察・消防からのお知らせ(毎週更新)・・・etc

- ・たかもりあの人(町出身著名人特集)
- ・TPCフォトダイアリー
- ・地域イベント
- ・週刊情報たかもり
- ・介護予防体操番組

◇住民参加型番組・企画番組



ストーリー性のある話題で共感

映像を通じた情報の共有

◇データ放送でくらしの情報をいつでも取得

企画・撮影・編集・放送の運営すべてが
実行委員会(高森町)役職員



- 緊急情報、防災無線情報
- 文通ライブカメラ、おくやみ情報・・・etc

YouTubeとも連携!  
高森町公式YouTubeチャンネル

◇映像のアーカイブ化



- ・懐かしのお宝映像
- ・先人の記録を共有
- ・高森の「今話」アーカイブ化

- ・高森型遠隔授業
- ・コロナ禍の休校中の勉強対策
- ・高森型受験対策授業
- ・高校受験生向けテレビ学習塾
- ・Tテレ(協賛TV)
- ・町社会体育、部活動、スポーツ活動の放送番組

◇サブチャンネル(教育関連番組)



世帯加入率約97%をフル活用した正しい情報の共有・共感の高森町!

(出典:高森町)



これが今後、コロナの後の一番のテーマになるのではないかと思います。後のトークセッションの中で、いろいろとお話をさせていただきたいと思いますが、次の時代への備えでもあります。これを間違えたり、怠ったりしてしまうことで、バブルの後に弾けた経営者や組織を多く見てきました。行政も一緒だと思います。次の時代への備えを、しっかりと行いたいと考えています。そして、その核となるところが、堀江さんが掲げられている『堀江ビジョン』です。漫画シリコンバレー構想で、新しい産業をどんどん生んでいき、若者にチャンスを与えるということです。その舞台が、高森町から、阿蘇全域、そして熊本県全部に広がっていくためには、行政だけではなく、今日お越しの民間のトップの方々や、若い世代の感覚が理解できる、尖った部分のある経営者の方に、堀江ビジョンに賛同していただくことが一番ではないかと思っています。

これからトークセッションが始まりますので、高森町の紹介は以上とさせていただきます。

<なぜ高森町が活動の拠点になったのか？>

【村上】ありがとうございます。今のお話の中に、『堀江ビジョン』という言葉が何度も登場しました。今日の初めにお話しいただいた中でも、皆さんはその一部を見出されたのではないかと思います。堀江さんの講演の中で、地方のどこに拠点を置くのかに悩んでいたときに、空気が綺麗でお水が美味しいなんていうところはどこにでもある、ということをおっしゃっていました。一方で、草村町長の行動力が、堀江ビジョンと噛み合ったというところでしょうか。なぜ高森町が、ここまでコアミックスさんと一緒にタッグを組んでやれるようになったのでしょうか。

【堀江】過去に複数の県から一緒に取り組みたいという話がありました。しかし、継続性が必要な事業であるにもかかわらず、担当者の配置転換によって終わってしまうという、不安定さがありました。取り組んだところで、ふと熱が消えて終わってしまうといけないのです。

漫画のビジネスをしていますと、中国や韓国にも行きましたが、そういう海外の投資家は、投資をした瞬間に「いくら儲かったんだ？」、「早く金をくれ」と言います。そのため、長期的な展望でのビジネスというものが、なかなかしづらい

のです。実は、中国からお話がありました。ただ、下手をすれば、投資した半年後くらいから、「いくら儲かった?」「いくら寄せ」が始まります。それは、人や文化を育てる商売には向きません。そういうことが、多々ありました。

そうした中で草村町長は、町長というものは再選されれば何年もいるわけです。もしかすると、私達とやることが負担になられているかもしれませんけれども、そういう覚悟を示していただきました。初期の段階で少し時間がかかるビジネスですから、そこにお付き合いをしていただけると、私達のビジネスも成立すると思ったわけです。そういう意味での、草村さんのやる気や継続力というものが、私達にとって一番の魅力であったということです。堀江ビジョンというのは、少し恥ずかしいです。

【村上】『堀江ビジョン』について、お話をお聞きしたいです。

【堀江】先程お話しした、コアミックスの長期的なビジネスプランのことです。

【村上】今のお話をお聞きになって、草村さんはいかがでしょう。

【草村】今日は、各分野から多くの先輩方がお越しですが、熊本の底上げには、どうしてもソフト事業が必要です。加えて、コンテンツ産業の可能性には果てしないものがある。堀江社長のお話を聞いたところ、「これだ!」と思いました。

これは特に、田舎のほうではよくある話です。自治体の中でそういうお話をしっかりと浸透させるときには、なかなか理解をしてもらいづらいため、時間がかかります。しかし、少しずつかたちとして見えてきたときは、「これはすごい」「これはいけるんじゃないか」と、理解されてきます。しかし、そのときには既に、嗅覚の鋭い方はそこに入ってこられています。

ですので、先ほど申し上げましたように、今日は多くの経営者の方がお越しですが、エンタメ業界の伸びしろというものは、世界の中でも日本はまだ伸びると思います。特に、漫画です。堀江さんが国際漫画 CAMP をなされたときに、約 50 か国から、世界の漫画家が来られました。来られた漫画家達は、実は自国でデビューされている方がほとんどでした。では、なぜ自国で売れないのでしょうか。その理由は、それぞれ国に事情があるわけです。たとえばスペインでしたら、こういう事情があります。スウェーデンでしたら、こういう事情があります。世界各国の漫画事情を、3 回のくまもと国際マンガキャンプを通してコアミックスさんが情報として集められたということは、次のビジネス展開にとってたいへん

大きいと思います。

●「くまもと国際まんがCamp in 阿蘇高森」(2018年9月～)



「サイレントマンガオーディション」を通じて海外のマンガクリエイターとの繋がりが増えるにつれ、日本への渡航希望の声も高まりました。

コアミックスでは以前より、海外の漫画家志望者たちが、アシスタントなどの実務経験を重ねながら成長すると同時に、オリジナル作品制作にも協力できるような体制、場所を創出する「マンガアカデミー」を構想していました。

その検証を兼ね、世界各国のサイレントマンガオーディション受賞者50名を迎え、日本での集中講義や、現地マーケットおよび創作環境のヒアリングを行う合宿イベントを企画。

この企画は、高森町が掲げた「エンタメ業界と連携したまちづくり事業」と合致し、高森町での開催が決定。

高森町の方々の協力と、阿蘇の雄大な景色と気候は、海外クリエイターたちの創作意欲と、アカデミー参加のための移住へのモチベーションを上げたと感じています。



(出典：(株)コアミックス)

外国から来る漫画家さんに、どういうふうにして、何を教えると、母国で売れるのか、ということです。何が足りていないのか、というところが、一番理解できたと思います。大手広告代理店が、何億円もかけてでも欲しい情報ではないかと思っています。加えて、そういう情報を、地方自治体として高森町が持っているということも、自治体としての強みだと思います。やはり、堀江社長との出会いは大きかったと思います。

【村上】今のお話の中で、くまもと国際マンガ CAMP という言葉が出てきましたけれども、こちらは2018年から行われています。サイレント漫画オーディション入賞者の中から、特に有望なクリエイターを高森町に招聘し、廃校を利用した施設などで、漫画づくりのノウハウなどを指導なさっているそうです。キャンプの参加者には、多数の国の方々がいらっしゃり、地元の方と、阿蘇の自然や、文化や、食を体験されます。優れた漫画家の育成と、熊本と世界を繋ぐという、その2つの取り組みを行っていらっしゃるということです。今回は、3回目を開催されました。1回目は、19か国から19名。2回目は、12か国から28名でした。コロナ禍ではありますが、オンラインでかなりの数の方がご覧になったようです。

【堀江】先ほどご質問がありましたが、なぜ熊本でやろうとしたか、ということについてです。たとえば僕の幼馴染でもあります、鶴屋百貨店の久我社長が、最

初に熊本で国際漫画祭をやろうということで、場所を提供してくれました。非常に懇意にしてくれました。そこからの縁があり、今度は草村さんと知り合って、というかたちです。またそれを地元紙や、いろいろなところが取り上げてくださることで、やれるのではないかと思います。

●熊本地震復興イベント『熊本国際漫画祭』(2017年4月～)



海外の受賞者が来熊



子供たちとのマンガ教室



応募作品展示(鶴屋百貨店)



北条司・堀江信彦トークショー

熊本地震から1年後の2017年4月。
“漫画で熊本に笑顔を届けよう”を合言葉に、
「復興支援2017 第1回熊本国際漫画祭」を開催。

開催にあたり、「笑顔」をテーマに作品を募集。世界各国から、セリフのないサイレントマンガ 209作と、イラスト551点が集まりました。
言葉や国境を越えて「熊本に笑顔届けたい」という、世界中の人々の想いあふれる作品が会場に並びました。

さらに、熊本市内のメイン会場には、多くの漫画家から熊本を応援する色紙が寄せられました。
地元熊本のご支援をいただき、ご来場いただいた、たくさんの方々のおかげで、毎年1回の開催が現在も続いています。

(出典:(株)コアミックス)

●編集部分室『コアミックスまんがラボ』(2018年10月～)



熊本をはじめとする九州の漫画家発掘・育成の拠点「コアミックスまんがラボ(鶴屋ウイング館7F)」を熊本市内に開設の際に、「株式会社熊本コアミックス」を設立。

デジタル化やネット環境の整備により漫画制作の環境が変わり、地方のマンガ家志望者たちは必ずしもリビングコストの高い東京に行く必要がなくなっています。また近年ではたとえ連載デビューできても、コストの高い都市では、漫画制作の体制(仕事場・アシスタント)の維持が難しくなっているという現状がありました。



しかし、地方にとどまる若いクリエイターたちの才能を伸ばし、収益性の高いIPを創出していくためには、同じ目標を持つ者たちが切磋琢磨しあい、刺激を与え合う「場」を提供する事が必要です。

コアミックスまんがラボでは、漫画制作ができる機材を無料で使用できるだけでなく「九州在住者・在学者限定の漫画賞」を毎年行い、作品の持ち込みを通じて、漫画制作で悩んでいる点や足りない部分を、東京の編集部員と大型モニターを通じ、直接やり取りすることができる環境を整えています。

(出典:(株)コアミックス)

あとは国際マンガ CAMP についてです。海外の何十か国もの人達を毎年招くということで、合宿をしながら、討論会と会議をやります。そこで一斉に、海外の漫画事情や、日本の漫画業界に何を望むのかということ、すべて集めます。加えて、彼らにレポートも書いてもらいます。草村さんが何億円もかかるとおっしゃっていたのは、代理店にそういうようなレポートを作成してほしいと伝えれ



ば、世界中のそれなりの漫画家に、直接何百人もインタビューをするとすると、軽く億を超える料金を取られるであろうということでおっしゃったと思います。そういう情報を3年間集めました。そういうことに、飽きずに付き合っていただけたということが、我が社が大きく高森町に投資をするということに繋がったということです。

【村上】何億円もの情報価値のあるイベントを自治体で行っていくということは、かなり負荷がかかることではないかと思いますが、いかがでしょうか。

【草村】この10年間くらい、職員には『思想より行動』を意識してもらいました。スピードは絶対的な付加価値をうむ可能性が高いということ、自ずと自然に実践していただけたのです。うちは小さな役場ですが、皆さんに理解してもらえてきた、と思っています。この国際マンガキャンプで、それが認識から確信に変わりました。やはり、負担はかかりますが、楽しみながらやっていただいた結果だと思います。

【村上】そうですか。外国人クリエイターさんは、今でこそコロナ禍でなかなかこちらにお越しいただくということではできませんが、1回目と2回目では実際に受け入れをされて、皆さん高森町というところを気に入られたのではないのでしょうか。

【草村】そうですね。もちろん、自然が豊かですので、そこを気に入られます。アーティストビレッジに住んで描かれる場所や風景は、南阿蘇だったり、阿蘇だったり、熊本だったりします。やはり、作品をどんどん出していかれると思いますので、町としては絶大なる世界エンタメの広報になると思います。うちの小さな町がうんぬんではなく、やはり阿蘇というものが持っているポテンシャルや、熊本県が持っているポテンシャルというところを、何らかのかたちで情報発信することで、世界の方が共有できるということです。そのツールが漫画になるのではないかと思います。

【村上】地元の方々や若い子供達の反応も、やはり変わってきましたか？

【草村】「移住定住」という言葉はよく聞きますが、現実に行っている自治体は全国にどのくらいあるのでしょうか。私は調べたことがありますが、簡単にはいきません。堀江社長がおっしゃったように、若手の方が田舎のほうに来て移住定住をするには、ハードルが高いところが多くあります。そういう中で、今度は22

名の方に来ていただきますが、何が一番すごいかといいますと、本気でやっているというところです。夢を持っている、ということです。夢を実現するために、田舎の町に住んででもやるぞ、というところを、しっかりと同じくらいの世代が見ることができるということです。ですから、町としては、その部分を教育に落としていきたいと思っています。やはり、中学生や高校生には見ていただきたいと思っています。今来ていただいている、女性劇団員の方の、第2第3の故郷が南阿蘇高森になりましたら、本当に宝になるのではないかと思います。

＜地域の視点から捉えたコンテンツ産業＞

【村上】次のテーマにまいりたいと思います。コンテンツを活用したビジネスという、今までは都心などで行われてきたものが、熊本市内や高森町で展開されるということについてです。先ほどのご講演の中でも「鉛筆と紙さえあればできます」というコメントもありました。それでも、私達のように熊本に住んでいる人間からしますと、都会とは違うのではないかと感じてしまいます。そんな中、迎える側となる高森町という地域の視点から見ると、どのような意義が見出せるというふうにお考えでしょうか。

【草村】やはり、可能性といいますか。うちがどうこうではなく、過疎地帯や田舎でも、通信環境さえしっかりと揃っていれば、都市部と変わらない挑戦ができるということを実証できるのではないかと思います。

【村上】一番の課題は、通信回線でしょうか？

【草村】そうです。情報通信基盤と、リビングコストの安さと、やはり、受け入れる態勢です。住民意識というものは、行政も含めて、議会議員の皆さんや、地域の方に迎え入れていただく、ということです。その意識をつくるためには、堀江社長がおっしゃったように、3年から5年くらいかかります。

そもそもの話ですが、セブン銀行代表取締役会長の二子石謙輔（注：高森町出身）さんから「草村さんも堀江さんのビジョンを聞いてみたらどうですか。紹介します」というところから、初めて東京でご紹介いただいたのです。堀江さんはいろいろなところで講演をされていました。お話を聞いて、「これを熊本以外の県に持っていくことを、指をくわえて見ているわけにはいかないぞ」と思いました。是非熊本で展開していただきたいというのが、最初のスタートでした。



【村上】地方からの熱視線は、おそらく草村町長ではなかったと思います。先ほどはアジアの投資家の話もありましたけれども、堀江社長は、地域からの視点をどんなふうに意識なさっていますか？

【堀江】私の実家は（熊本市中央区の）黒髪という場所にありまして、熊本大学の横にあります。父は公務員で、母は下宿屋を営んでいました。私と兄を含めて、その下宿屋がありましたので、なんとか東京の大学に行くことができました。

当時の母の熊大生に対する接し方は、小学生のときからずっと知っているわけです。「学生さん」と言って可愛がるといいますか、愛するといいますか、それが1つの姿なのです。草村さん達にも言いましたが、東京や世界から、いろいろな人が来るでしょう。たとえば、下宿したり、寮に住んだりもするでしょう。そういうときに、地域の人がその人達を異質な人として迎えるのではなくて、愛着を持って迎え入れてくれるような環境があれば、文化がうまれ、成立していくでしょう。ですから、熊本大学周辺の学生街のようなイメージなのです。そういうお話をしました。

やはり、それがないと続きません。たとえば、インドネシアの子に、なぜ高森に来たいのかを聞きました。ジャカルタに住んでいる子達は、人が多すぎて地盤沈下を起こします。それで、首都を変えるというような話になっていますけれども、人ごみの中にいたことしかないわけです。ですから、人を見たくない、ということ。もっと静かな環境で生きていきたいのだという、私達としては想像もつかないような理由があったりします。

他には、海外で漫画を描いていたとしても、日本風の漫画を描いていると、どうしても二流や偽物扱いされます。ですから、1回日本でデビューがしたい、という人もいます。そうすれば、国に帰ったときに商売になります。日本人野球選手が大リーグで戦うようなものです。そうしたら、日本に帰ってきても商売になる。ですから、日本に1回行って修行をしたいということです。様々な理由があります。それらが、ある種、私達がやれる範囲内におさまっているということです。

ですから、日本の熊本でやるということには、意味があるというわけです。死ぬほど暑い国の人もありますから、高森の寒さが良いと言う人もいます。ありがたいことですが、世界中の人には、それぞれ理由はありますけれども、

一生住むわけではありませんので、約 3 年修行していただければいいのです。そういう意味では、海外の方達にとっても魅力的な場所ではないでしょうか。

【村上】海外の方々にとって、日本という場所は、漫画というジャンルではトップというふうに考えていらっしゃるのでしょうか。

【堀江】もちろんです。海外の子達が日本に来ると、漫画が溢れていると考えるわけです。コンビニに行くと、漫画が 24 時間いつでも手に入ります。看板を見ると、漫画のキャラクターが描かれているものがたくさんあります。電車に乗ると、漫画雑誌の中吊り広告がたくさん吊るしてあります。「好きなものに溢れている」ということが、海外から来た漫画好きの人達の感想です。

今の私達日本人にとっては当たり前の景色ですけど、世界に行けば、そんな国はありません。そういう意味では、好きなものに溢れているわけです。好きなものがすぐに手に入るというのは、夢の国ではないですか。劇団員の子に、高森は田舎だと散々脅かしましたが、高森に実際に行くと、「そんなに田舎じゃないですよ」と言われました。「買い物もちゃんとできますし、車があればすぐに市内に行けますし、全然田舎じゃないですよ」と言っていました。そんなものです。東京にいと、通勤時間が 1 時間や 2 時間ということは当たり前です。けれど、高森では 1 時間と少しで熊本市内に出てこられるでしょう？ そうすると、東京の人も遠いとは思わないのではないのでしょうか。

【村上】そんなものですか。

【堀江】そんなものです。私が若い頃に東京にいたときは、通勤時間に往復 3 時間をかけていましたから、高森から通うことは、屁みたいなものです。車で行けるなら、こんなに幸せなことはありません。ですから、直通列車があればの話ですが、高森でも南阿蘇鉄道が全線復旧すれば、市内も通勤圏になるのではないのでしょうか。そういうふうに考え方を変えていくと、地域が活性化していくということが目に見えてくるような気がします。

【村上】地域の活性化という視点から見て、草村町長はどのように思われますか？

【草村】今、堀江さんがおっしゃった通りです。海外のクリエイターの方もそうですが、日本人の漫画家の方も、特に熊本には、(ONE PIECE の作者の) 尾田先生もいらっしゃいます。蒲島知事が堀江さんとお話しをされたとき、「堀江さん

は、これから尾田先生みたいな人が何人も出てくるような、そういうチャレンジをされるのですね」ということをおっしゃっていたのですが、それはとてもわかりやすい表現だと思います。うちの町からうまれるチャンスもあります。

また、堀江さんがおっしゃったように、私が唱えていたアクセス 30 分台構想という、南阿蘇鉄道から乗り換えなしで熊本方面に直接行けるというところもありますが、(国道 325 号線の) 阿蘇大橋も開通しましたし、国道 57 号線も 4 車線化ができましたので、本当に十分通勤圏内に入ってきていると思います。そうした環境の中で高森に住んでいただければと思います。また、是非施設を見に来ていただきたいと思うのですが、うちの旧高森温泉館を民間のコアミックスさんが購入なされて、自ら改修されて、生まれ変わらせたのです。

そこに、人が集まる仕組みでしたり、仕掛けをなされていますので、まさにこれが地方創生のモデルなのではないかというふうに私は思います。昔のバブル期の建物を、休業したり、ストップしたりしている事例は、全国の自治体にもたくさんあります。それを蘇らせるといいですか、本当に次の展開にもっていった自治体というのは、なかなかないのではないかと思います。その上、高森町は 1 円も出していません。全部民間企業でなされたというところが、すごいと思います。

【村上】誰でも見に行くことができるのですか？

【堀江】いえ、それは駄目ですけど、言ってほしいです。言っていただければ、ご案内することはできます。是非、見ていただきたいと思っています。そこはまだ開発の初期段階でして、今から何倍にも広がっていく計画を持っています。その入り口でも見ていただければと思っています。一流のデザイナーにデザインさせた地域になっておりまして、おしゃれな場所ですので、是非見ていただければと思います。

【村上】高森温泉館のときに、1 階の大浴場だったところがありましたが、あそこは何になったのでしょうか？

【堀江】スタジオと練習場になりました。劇団の練習場です。それから、試写室と、YouTube の編集スタジオになっています。それと、一部は図書館になりました。ここには、タレント達がいろんなことを学ぶときに必要な資料があります。2 階は漫画家の仕事場です。40 人くらいを収容できると思います。それから、キ

ッチンもあります。私は飲食業もやっていますけれど、東京からイタリアンのシェフを3人連れてきました。そこに、当社の飲食部のセントラルキッチンが置いてあります。そこで熊本の食材を使い、冷凍して東京に送るというようなことをやっております。高森のふるさと納税の返礼品を開発するということとも連動しています。ですから、そのシェフ達がつくった料理を、朝昼晩、劇団員達は食べています。

●熊本商品開発部(2020年10月～)



コアミックス関連企業で、飲食事業として吉祥寺に「カフェゼノン」と熊本食材専門の飲食店「ゼノンサカバ」を経営する「株式会社じぞう屋」より、調理スタッフ、マネージャーなど4名を派遣し、「阿蘇096区」内にセントラルキッチンを導入。

「熊本の食材×マンガコンテンツ」

を使用したオリジナルブランド商品開発を行っています。

現在は高森町と連携した「ふるさと納税商品」「南阿蘇鉄道の駅弁」「地産コーラ」や「オリジナルジン」「スイーツ」などの開発が進行中です。今後も地域の自治体や企業、生産者との結びつきを強め、さらなる発展を目指しています。



(出典:(株)コアミックス)

【村上】今のお話を少し聞いただけで、私のイメージとはだいぶ変わったんだと思いました。

【堀江】まったく違うと思います。

【村上】全然違いますか。

【草村】まったく違います。

【村上】そうですね。もうそこが漫画とアート全般の発信基地となってきたということですね。

【草村】そうです、アート全般です。たとえば、これからの1つのかたちとしては、eスポーツにも潜在力があると考えています。エンタメとeスポーツというのは、マッチングが最高です。どれだけの仕事を生んでいくかといいますと、おそらくすごい数の仕事を生むと思います。eスポーツの拠点や、堀江さんがな



されている劇団の劇場などがある。そこにはグランピングがあつたりすること
も考えられます。私が今民間企業のオーナーだとすると、投資対象としてすごく
魅力のある動きかなと思いますし、注目したいと思う場所になるのではないで
しょうか。

【村上】アートの発信基地でもあり、ビジネスの 1 つのモデル地域になるとい
うことですね。

【草村】そうです。最初に堀江社長がおっしゃったように、そもそも私が最初
思ったことは、阿蘇は国立公園を抱えており、阿蘇は熊本の宝でもありますし、
世界の宝なのです。よくある企業誘致でしたら、たとえば工場をつくるですとか、
そういう話ばかりなのです。ですが、エンタメというものは、水一滴汚すことも
ありませんし、空気や環境に負荷を与えるという産業でもありません。ですので、
阿蘇の中でやるには、これ以上のものはないのではないかと思います。これから
の時代のモデル的な地域になってもいいのではないかと思います。

<これからの展開について>

【村上】これからコアミックスさんは、今後も高森町と連携して、新たな構想も
いろいろとお持ちであるということですが、具体的なこれからの展望などをお
聞かせいただけますか？

【堀江】アーティストビレッジです。これは、漫画家や劇団員だけではなく、ス
ポーツマンのための施設であるとか。私はスポーツもアートだと思っておりま
すので、そういう意味では、そういう方達の集まる場所をつくっていきたくと思
っています。

また、私が熊本でいろいろとやろうとしたときに、1つ困ったことがありまし
た。それは商社機能がないということです。例えば、我が社に『北斗の拳』とい
うキャラクターがあります。一方で、佐賀の酒蔵さんでは、焼酎が余っていて売
れない、ということがありました。何とかしたいということで、我が社の『北
斗の拳』シリーズのラベルをつけた焼酎を売りました。そうしたら、1 か月で 50
万本の在庫が捌けました。そういう相乗効果が起こるわけです。そういうことを
熊本の企業の方達ともっとやりたいと思っても、なかなか上手くいかないのだ
す。そういうことを今まで提案している会社もなかったでしょうし、若い方が思



いつかれても、道がなかったと思うわけです。しかし、私達はここにおりますし、先ほど申し上げた通り「一緒にやっていきたい」と考えています。私にとっては熊本の企業全部を 1 つの会社組織と捉えることもできます。ものをつくることもできれば、考えることもできたりします。上手く融合していけば、漫画ビジネス以外の部分でのビジネスもでき得るのではないかと思います。先程ご説明したクロスメディア・フランチャイズビジネスといいますか、そういうことも考え得るのではないのでしょうか。これは他のアーティスト達の芸能活動やスポーツ活動などでも同じだと思います。

たとえばの話ですが、うちの劇団では今、東京の一流のスタッフ達につくった、熊本の応援歌をつくっています。既にレコーディングをしましたけれども、そういうものが熊本から発信されていき、何かの 1 つのビジネスになるのではないかと考えています。うちの劇団員達が、熊本の文化を伝える大使として、日本中のいろいろなところを公演して歩くということなどと、上手く連動しながらやっていくと、非常にいいのではないかと思います。

特に、今回熊本でやる公演は、前田慶次という武将と、加藤清正の友情譚のようなものが中心です。加藤清正が、熊本城をつくった頃の若い姿で活躍するドラマというものは、おそらく日本に存在しなかったと思います。それが見られるという意味では、観光にもいい影響を与えるのではないかと思います。自分で言うのもなんですけれど、芝居を見て、熊本城を見に行くと、きっとありがたさが違うと思います。そういうところが、もっといろいろと絡みついたりするといいなと思います。私では思いつかないアイデアをお持ちの方がいらっしゃると思いますので、そういう方達と一緒にやるということを楽しみにしております。

【村上】いわゆる、“宝” 達は既に高森に集まっている。22 人 (3 月末現在) の、10 代後半から 30 代前半の女性。半分は熊本出身の方で、あと半分は、いろんな経験をされた方々が集まっていちゃいますよね。

【堀江】そうです。元ダンサーの方や、元 USJ の方もいます。本当に朝から晩まで 24 時間やっていると、ものすごい成長をします。先ほども言いましたけれども、漫画家を集めてそういう合宿所みたいなものをつくりますと、成長が早いです。私が劇団をやり始めて、半年くらいの合宿生活がありましたけれども、「ほら見てごらん」と。皆、成長の早さに驚いています。ですから、そうやって集中

的に追い込んだ時の人の成長は、すごいものです。そういう意味で、ここから発信していくという自信ができました。

【村上】劇団員さん達が長期滞在をして、ものすごく著しい成長を遂げているという中で、外国人クリエイターの人達も、長期滞在ということを念頭に置いていらっしゃるんですか？

【堀江】もちろんです。滞在といいますか、そこで約3年は修行しなければ上達しないと思います。ですから、長期滞在や、観光のような、そういう感覚ではありません。むしろ、短期就労ビザのようなものです。帰化してもらうということは、考えていません。そこで徹底的に磨き上げて、日本でデビューをしますと、描くところを選ばなくなります。そうなれば、自分の国に帰って、自分の国で手塚治虫になってくれ、ということです。それで世界中に漫画マーケットを広げて欲しい、ということが僕らの考え方です。

そのためには、国や県と交渉をしながら、そういう方達の就労ビザの問題など、さまざまな問題を今から詰めていかなければいけないと思っています。必要なものの一つは留学できる学校です。留学をしながら仕事もする、という感じです。そこが大事だと思っています。そうすると、そこに日本語学校もつくらなければいけなくなってきます。

【村上】日本語の学校が必要と言うことですね。

【堀江】英語の学校も必要になってきます。高校に対しては、そういうものを設立してくれませんか、ということになりますし、大学に対してはサテライト校を出してくれませんか、ということになります。

【草村】漫画科、みたいなものです。

【村上】漫画科ですか。家と書くのではなくて、漫画コースの漫画科ということですね。

【草村】高森町内には県立高校がありますが、コアミックスさんという企業が進出してくれたおかげで、1つの可能性が出てきたと思います。新しい人材をつくるところも含めて、ということです。漫画科と簡単にいいですけど、漫画を教えるのではなくて、先ほどおっしゃったように、絵コンテも教えられて、ストーリーも書ける人材を養成するということになります。

コアミックスさんのすごいところは、漫画編集出版会社ですので、プロの漫画



家さんや、プロの編集者さんなど、たくさんの方を従業員として抱えてこられたというところです。ですから、学生の入口から出口までのカリキュラムがきちんと決められるので、中途半端な人材育成ではなくて、きちんとした人材育成がコミックスさんではできるということです。全国に、県立高校の漫画科というものはないわけですが、おそらくそこで育っていけば、京都アニメーションもそうですけれども、専門学校ができたり、いろんな人材の輩出ができたり、ということが、うちの町からできるのではないかと考えていますので、そこにチャレンジしていきたいと思っています。

【村上】高森町としては、かなり大きな取り組みですね。

【堀江】産・官・学の連動というものが、後々のキーワードになってくるのではないかと思います。やはり、学びの場として、そういうプロの合宿所ができてデビューし始めると、若い人は「絶対にそこに行きたい!」と言い始めます。そうすると、そこで教える学校みたいな受け皿も、必要になるわけです。その人達は自分でお金を払ってきてね、ということになります。そういう必要があると思っています。また外国から来る、そういう人達には日本語を教えることも必要です。今は、大分の立命館アジア太平洋大学という国際的な学校がありますが、コミックスとしては、漫画とかアートを中心にした、そういう学びの場を想定しています。ビジネスをする場であり、学びである場というものを想定しているということです。

【村上】産・官・学が一緒になってやると、ものすごく進展が期待されます。これからやらないといけない課題になってきそうですね。

【堀江】そうなってくると思います。日本語をおぼえないと、日本の文化が理解できません。それを正しく教えることができるのか、ということの問題がでてきます。草村さんにも、場合によっては、町立でも良いので、日本語学校を設立して欲しいということを言っています。



＜熊本のみなさまへのメッセージ＞

【村上】最後に一言ずつ、皆様にメッセージをいただきたいと思います。それでは、堀江社長からお願いします。

【堀江】先ほどから再三言っておりますけれど、コンテンツビジネスというのはアイデアのビジネスですので、いわゆる大規模な何かが必要なわけではありません。銀行さんとしては、もう少し気張ったものをつくれと言われるかもしれませんが、そうではないわけです。確実に、身の丈の中からしっかりと積み上げていって、発展させていくということが大事なのではないかと思います。ですから、かつての箱物のようにドンとつくっていくということは、私は草村さんには避けてほしいと思っています。廃校利用でも、何でも結構です。まずは着実にやっていきますか、ということです。決して大きなお金とか施設が必要なビジネスではございません。むしろ、1人1人のアイデアとか情熱で成り立つビジネスで、それで世界と勝負ができるというビジネスでございますので、そこをよくご理解してご提案いただければと思っております。

【村上】ありがとうございました。草村町長、お願いいたします。

【草村】現在のコロナ禍は、インターネットが現れたときと同じくらい、後世になったときに「あの時がターニングポイントだった」と振り返ることになる時期かもしれません。それは、もしかすると今かもしれません。そのため、次の時代への備えということで、『堀江ビジョン』を用意して、高森町は頑張って発展していきたいというふうに思っております。どうぞ期待をしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

【村上】ありがとうございます。今日は皆様、いろいろなお立場でお話をお聞きになったと思いますが、今日のトークとご講演が、何かが始まるきっかけになるようなことを、私は感じました。今後の熊本の発展の一助になると思います。

それでは、トークセッションを終了いたします。堀江様、草村様、ありがとうございました。どうぞ、大きな拍手をお送りください。



©Development Bank of Japan Inc.2021

本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引等を勧誘するものではありません。
本資料は当行が信頼に足ると判断した情報に基づいて作成されていますが、当行はその正確性・確実性を保証するものではありません。本資料のご利用に際しましては、ご自身のご判断でなされますようお願い致します。本資料は著作物であり、著作権法に基づき保護されています。本資料の全文または一部を転載・複製する際は、著作権者の許諾が必要ですので、当行までご連絡下さい。著作権法の定めに従い引用・転載・複製する際には、必ず、『出所：日本政策投資銀行』と明記して下さい。

（お問い合わせ先）

株式会社日本政策投資銀行 九州支店

〒810-0001

福岡市中央区天神2-12-1 天神ビル2F

Tel： 092-741-7737